

医を 又える

2

救急車のサイレンが、茂原市の公立長生病院に届くと、当直の医師らが搬入口に姿を見せた。6月下旬の午前0時過ぎ、額から出血した60歳代の男性が、処置室に運び込まれた。幸い軽傷で済んだが、搬送した救急隊長は「市原や千葉に搬送すると時間が倍以上かかる。完全ではないが、管内の病院で完結できて良かった」と表情を緩めた。

◇ 茂原市など7市町村で構成する長生郡市広域市町村圏組合は5月から、入院や手術が必要な2次救急の内科と外科で、基本的に管内の病院が診られる態勢を3年1か月ぶりに復活した。長生郡市救急医療体制検討委員会の宍倉朋胤委員長（宍倉病院副院長）は、

夜間救急

官民連携で空白日ゼロ

「地域住民の安心をひとまず確保できた」と話す。午後8時から翌朝6時までの2次救急を輪番で担うのは、広域組合が運営する公立

の長生、民間の菅原、宍倉、山之内、福島孝徳記念の計5病院。

2006年4月以降、輪番病院が不在の空白日は多い月

理者の田中豊彦・茂原市長は毎回出席。医師不足と高齢化に悩む民間病院の現状に理解を示し、輪番復活に財政支援を約束する一方で、病院側に

回に増やした。北原功雄院長は「当番日は脳外科医を別に待機させ、脳外傷などの重篤な患者さんも診られるようにした」と独自の地域貢献策を打ち出す。

◇

14日を数え、08年も毎月10日前後あった。広域組合消防本部によると、08年は救急搬送した6897人のうち、管外搬出率は36%、2473人に上ったが、空白を解消した今年5月、夜間の管外搬送率は30%に下がった。関係者は「良い兆しだ」と胸をなで下ろした。

◇

今回の空白解消は、行政と地元医師会の信頼関係によるところが大きい。広域組合が昨年7月に発足させた救急医療体制検討委は、今年3月まで12回の会合を開いたが、管

当番回数の増加を求めた。新たな試みとして、核となる長生病院の当番を火、金、土曜に固定した。同病院の小笠原明・医局長は「当直明けを休みにできる環境が整い、勤務が組みやすくなった。病棟・外来業務などの流れも良くなり、当番を従来の月8、10回から12、14回にすることができた」と話す。

住民の安心を支える2次救急。広域組合の7市町村は今年度、輪番に入る5病院に業務委託費として、計1億8331万円を支出する。1回当たり約50万円は隣の山武郡市の3倍以上だが、田中市長は市議会などで「空白日の解消を優先させた」と理解を求めた。空白日はなくなったが、「24時間」の実現は課題のままで。病院の一般的な診療時間は午前9時から午後5時。当番前後の朝と夜に計5、6時間の空白が残る。「医療過疎地の救急医療はどうあるべきか」に検討していきたい」と語る宍倉委員長。挑戦は今後も続く。



深夜に救急搬送される患者（公立長生病院で）一部画像を修整しています